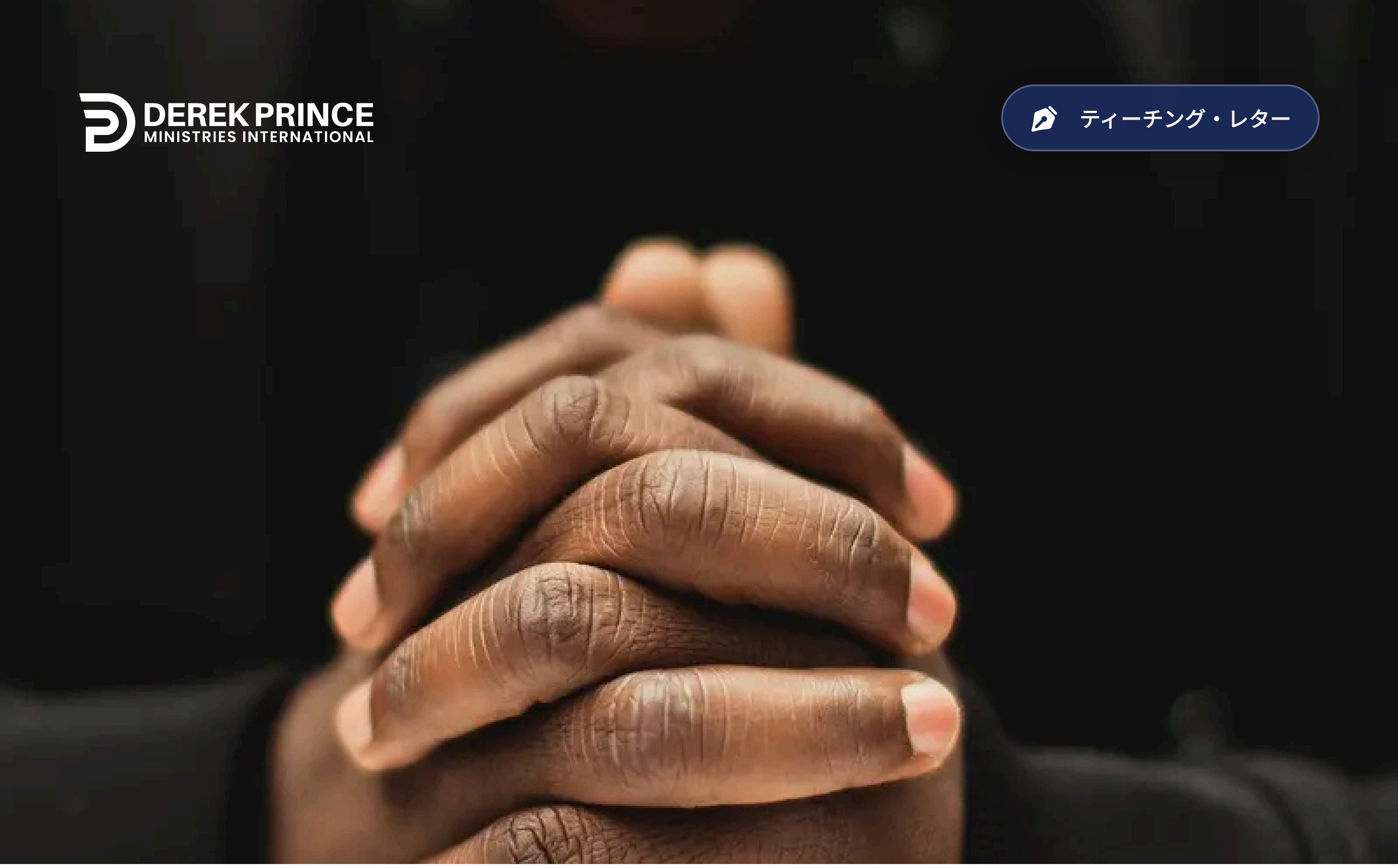



2つの素晴らしい実

ティーチング・レター
著者 デレク・プリンス

聖霊のバプテスマが与えられるのは、どのような目的のためでしょうか。別の言い方をするなら、神は聖霊のバプテスマを通して、信者の生活にどのような実を生み出したいと願われているのでしょうか。この学びの書簡で、部分的ではありますが、その答えを探っていきましょう。

これらの質問に触れる前に、聖霊のバプテスマに関連する3つの一般的なポイントを強調したいと思います。

第一に、信者の生活において、聖霊は決して独裁的な役割をしません。聖霊は束縛ではなく、自由をもたらします。ですから、聖霊は、私たちが自発的に自分の人生と人格の導き、制御を聖霊にゆだねる度合いに応じて私たちを導き、指示を与えるだけです。

第二に、聖霊のバプテスマは、キリストにある信者のための、神の完全な備えの主要で不可欠な部分です。それゆえ、他の主要なクリスチャンとしての経験や義務の要素から切り離すことは決して適切ではありません。その要素には、日々の個人的な聖書の学び、献身、自制、熱心で霊的な地域教会に参加することを含みます。もし、聖霊のバプテスマがこれらのクリスチャン生活の要素から切り離されるなら、信仰生活の真の意義を失い、また信仰生活の真の目的を達成することに失敗してしまいます。

第三に、聖霊のバプテスマは、単に新たな霊的祝福へ導く入り口となるだけではなく、新たな霊的戦いの入り口でもあります。ですから、聖霊のバプテスマを経験しているすべてのクリスチャンは、心構えと備えが必要です。私たちはみな、「神のすべての武具をとる」（エペソ6:13-17）必要があります。特に、「御霊の与える剣である、神のことば」（17節）を取って、用いなければなりません。

では、聖霊のバプテスマが、ひとり一人の信者の生活と体験にもたらす実を考えてみましょう。それには、主に8つの実があります。この書簡では、そのうちの2つについて見ていきます。
超自然的な生活に入る

超自然的な生活に入る

著者がクリスチャンに向けて語っているヘブル書の箇所から始めましょう。

> 「一度光を受けて天からの賜物の味を知り、聖霊にあずかる者となり、神のすばらしいみことばと、後にやがて来る世の力とを味わったうえで…」（ヘブル6:4-5）

© 2011 - デレク・プリンス・ミニストリーズ・インターナショナル・インク

これは、聖霊が有しているものにあずかる者となった人が、その体験の結果として、やがて来る世の力を味わった、ということを言っています。

聖霊のバプテスマの第一の実は、次に来る世にある完全な力、まったく新しい種類の力を、信者に前もって味わわせてくれることです。このバプテスマを通して、信者は、のちに来る時代に完全なかたちで現われるために今は取って置かれている超自然的な力のいくらかを、今経験し始めます。

約束の霊をもって証印が押される

聖霊のバプテスマの超自然的な力についてのこの概論は、エペソ人への手紙のパウロのことばと一致しています。パウロは、聖霊を受けたクリスチャンに語っています。

> *「この方にあってあなたがたもまた、真理のことば、あなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じたことにより、約束の聖霊をもって証印を押されました。聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証です。これは神の民の贖いのためであり、神の栄光がほめたたえられるためです。」*（エペソ1:13-14）

パウロはここで、聖霊をもって証印が押される経験を、「私たちが神の民の贖いのために御国を受け継ぐ」と表現しています。この「証印が押される」という言葉は、印、または保証という意味です。パウロは、土地を購入する際の古代の習慣を適用しています。合意が得られたら、買主はその土地の土を少し取ります。この取った土は「保証」、あるいは「印」と呼ばれました。その土は、いずれ全相続を完全に所有することになる、買主に属するものとなったという法的証拠を示すものでした。

このことは、ひとり一人の信者にとって、聖霊のバプテスマにどのような意味があるかを見事に表わしています。この経験によって、私たちは信者として、のちに来る世で私たちを待っている、力と栄光の相続の一部分をこの地上において、今、前もって味わうことができるのです。この地において、その天の力と栄光の一部分を受け取ることは、いずれ相続として完全に所有することになる、信者のものとなるという法的全相続の証拠です。それこそが、聖霊は「私たちが神の民の贖いのために御国を受け継ぐための保証である。」とパウロが確信をもって言っている理由です。

聖霊のバプテスマを受けた信者たちは、今現在、その人の内側に天の一片をすでに持っています。この保証に基づいて、今はまだ一部しか味わっていないものを、私たちはいつの日か完全に楽しむようになることを理解します。

聖なる地

この「土地の一片」の考え方は、第二列王記に書かれている、らい病に冒されたシリヤの将軍ナアマンのいやしの話で見事に表現されています。奇跡的ないやしの結果、ナアマンは、主、イスラエルの神、ヤハウェだけがまことの神であると知るようになりました。しかし、彼は間もなく、汚れた異教の宮で偶像礼拝をしている異教徒の地に戻らなくてはなりませんでした。そのことを念頭に置くと、ナアマンがイスラエルの地を去る前に、ある特別な願いをしたことが読み取れます。

> *「そこでナアマンは言った。『だめでしたら、どうか二頭の騾馬に載せるだけの土をしもべに与えてください。しもべはこれからはもう、ほかの神々に全焼のいけにえや、その他のいけにえをささげず、ただ主にのみささげますから。』」*（II列王記5:17）

ナアマンはなぜ、イスラエルの地の土を持って帰りたいと思ったのでしょうか。彼は、主の聖なる土地と、それと対照的な自分の国の地と人々の汚れを認識していました。ですから、二度と汚れた土で礼拝をしないと決心しました。主のきよさは、主ご自身の地からとった土の上に立ち、礼拝をするべきだとナアマンに思わせたのです。ナアマンはイスラエルの地に残って住み続けることはできないので、母国の家にイスラエルの土の一部を持って帰ろうと決めたのです。彼は自分の特別な礼拝の場所をその土で設けました。

そう、聖霊のバプテスマは信者のものです。この経験をした人は、イエスのことばに新しい理解を与えられます。

> *「神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。」*（ヨハネ4:24）

このような信者は、もはや単なる形式的な礼拝形式や儀式では満足できません。天のような地を受け、その栄光と神のきよさを一目見て、私たちはその聖なる土を持って帰るのです。どのような状況になっても、私たちはもはや汚れた土地ではなく、聖なる地で礼拝しなければなりません。礼拝は今や、霊とまことによってなされるものです。

超自然によって浸透する

聖霊に満たされた信者として、礼拝の真理は、他のすべての信仰生活面においても等しく真理です。聖霊のバプテスマを通して、私たちは新たな超自然的な生活の中に入っていきます。超自然が自然へと変えられるのです。

私たちが開かれた心で新約聖書を学ぶとき、初期のクリスチャンたちの生涯と経験全体に、超自然が隅々まで浸透していたということを認めざるを得ません。超自然的な経験は、何か偶発

的なものや、おまけではありませんでした。それは、クリスチャンとしての生活全体に不可欠なものでした。彼らの祈りや説教は超自然的でした。彼らは超自然的に導かれ、強められ、運ばれ（参照：使徒8:39）、守られました。使徒の働きの書から超自然を取り除くと、意味も一貫性もない記録しか残りません。使徒の働き2章の聖霊の降臨以降、超自然の記録が主要となっていない章は一つとして見つけることはできないのです。

エペソでのパウロの働きにおいて、私たちは最も目を引き、示唆に富んだ表現を見つけることができます。「神はパウロの手によって驚くべき奇蹟を行われた」（使徒19:11）。ギリシャ語の「驚くべき奇蹟」は、「日常的には起こらないような奇蹟」と訳すことができるでしょう。

奇蹟は初代教会においては日常的に起こっていました。通常、彼らは特別な驚きや論評をすることはありませんでした。しかし、パウロの働きを通してエペソでなされた奇蹟は、そのような初代教会でさえ、特別に記録されるべきものと思われたのです。

今日、果たしていくつの教会で*「驚くべき奇蹟」*という言葉を使う機会が見いだせるでしょうか。今日、奇蹟が起こったことのある教会はいったいいくつあるでしょうか。ましてや、毎日起こっている教会は。

超自然を見たことも経験もしていない私たちが、新約聖書のキリスト教について語る権利はないというのが事実です。新約のキリスト教は決して超自然やその経験とは切り離せないものです。超自然と新約のキリスト教は、ほどくことができないように織り込まれていました。

私たちは、超自然なしに新約聖書の教理を持つことはできるかもしれませんが、それは体験のない、むなしい教理です。そのような超自然な体験から分離された教理は、IIコリント3:6でパウロが書いているようなものです。「文字は殺し、御霊は生かすからです。」新約聖書の教理の文字にいのちを与えることができるのは、ただ聖霊だけです。ただ聖霊だけが、一人ひとりの信者のために、生きた人格的な超自然の教理の道を造ることができるのです。それこそが、まさに聖霊のバプテスマの主な目的の一つです。

聖書の新しい理解

次に私たちが見いだす聖霊のバプテスマの偉大な目的は、聖霊は聖書についての私たちの導き手、かつ教師となるということです。これは、ヨハネの福音書の2つの聖句にキリストご自身によってはっきりと宣言されています。

> *「しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。」*（ヨハネ14:26）

イエスは初期の働きの間に、弟子たちにご自身の死と復活について多く教えましたが、その時点では、弟子たちはそれを理解することも、心に留めておくこともできませんでした。しかしイエスは、聖霊が来て彼らの内に住むと、その人の個人的な教師となると保証されました。聖霊は弟子たちにイエスが教えたことすべてを思い出させ、正しく理解させてくれました。しかし、聖霊は地上にイエスがおられた間の教えを説明するだけにはとどまりません。聖霊は、神の人間に対する啓示の真理全体について、完全で正しい理解へと弟子たちを導きました。

このことは、イエスによってさらに強調されています。

> *「しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。御霊は自分から語るのではなく、聞くままを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。」*（ヨハネ16:13）

この「すべての真理」という言葉は、「あなたのみことばは真理です。」とヨハネ17:17でイエスが引用していると解釈できるでしょう。このように、イエスは神のことばを通して神の啓示に触れ、聖霊が聖書を通して人間への神の全啓示の正しい理解へと導くことを弟子たちに約束しています。これは、旧約聖書も、またイエスの地上での働きの間の教え、そしてペンテコステのあとパウロや他の使徒たちを通して教会に与えられた福音の真理のさらなる啓示も含んでいます。聖霊は、聖書における神の啓示をすべて明らかにする者、解き明かす者、教師となるために教会に与えられました。

ペンテコステの日

聖霊が弟子たちにみことばを解き明かすというキリストの約束の成就は、ペンテコステの日に非常にはっきりと見られます。弟子たちに聖霊が注がれるや否や、弟子たちは他のことばで話し始め、疑問が起こりました。*「いったいこれはどうしたことか。」*（使徒2:12）。数節あとに、ペテロがこの疑問に答えているのを読むことができます。

> *「これは、預言者ヨエルによって語られた事です。『神は言われる。終わりの日に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。』」*（使徒2:16-17）

少しも躊躇することなく、ペテロはヨエル2章で与えられている終わりの日についての預言を引用し解説を続けます。そのあとに続く説教でペテロが語っていることのほぼ半分は旧約聖書の直接引用です。ペテロは、キリストの死と復活の事実、そして聖霊の降臨を最も明確で力強い方法でみことばの教えに適用しました。

ここでのペテロの旧約聖書の解説と、イエスが地上におられた時の同じみことばについての、ペテロや他の弟子たちの理解の

欠如（たとえペンテコステの日まで考慮しても）との間には、あまりにも大きな差があります。みことばに対する弟子たちのこの完全な変化の現われは、段階的なプロセスではありませんでした。それは、聖霊が来たことによって突然生まれたものです。

聖霊が弟子たちのうちに宿るやいなや、彼らの聖書理解が直接刺激され、明確にされました。彼らの以前の疑いや混乱は、速やかに明確な理解と説得力のあるものへと変えられました。

パウロの例

この同様の劇的な変化はペンテコステから先、聖霊に満たされた信者たちの明確なしるしとして継続しました。例えば、タルソのサウロは、当時最も有名だったガマリエルから旧約聖書の知識を学びました。しかし、サウロには当初、光がなく、それらのみことばを正しく適用するという理解がありませんでした。

目からうろこが落ちるほど聖霊に満たされ、それらのみことばを理解し適用することができるようになったのは、ダマスコでアナニヤがサウロに手を置いて祈った後でした。この経験の後のことを、私たちは使徒9:20で読み取れます。*「そしてただちに、諸会堂で、イエスは神の子であると宣べ伝え始めた。」*

「ただちに」という言葉に注目してください。ゆっくり、徐々に理解に苦しみながらではなく、即座の光です。聖霊が来られた瞬間、サウロが長年知っていながら、みことばをどのように適用するか、解釈するかまったくわかっていなかったところに、聖霊がまったく新しい光を差し込ませたのです。

聖霊がペテロやサウロ、また新約時代のクリスチャンに行なったことを、聖霊は今日のすべてのクリスチャンにも行ないたいと願い、またそれができるのです。しかし、まずひとり一人のクリスチャンが、聖霊のバプテスマを通してこの素晴らしい、内に住んでくださる導き手、教師、解き明かす方を個人的に受け入れなければなりません。

聖霊は著者である

ここでもう一つ付け加えなくてはなりません。聖霊はクリスチャンのために任命された聖書を解き明かす方、教師であるべきだということは、まったく自然で理にかなっているということです。その理由は明らかです。聖霊は単に解き明かす方だけではなく、聖書すべての著者であるからです。このように、神の知恵の備えによって、聖書の著者は解き明かす方へと変えられたのです。

Ⅱテモテ3:16で言われています。*「聖書はすべて、神の霊感によるもので…」*ここで「霊感」と訳されている言葉は、直接的に「霊」という言葉につながります。ですから、その意味は、聖書はすべて神の霊によって息が吹き込まれたもの、ということです。さらに簡単に言うと、神の霊は聖書のすべての著者であるのです。

さらに、Ⅱペテロ1:20-21に、*「すなわち、聖書の預言はみな、人の私的解釈を施してはならない、ということです。なぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。」*というのがあります。ペテロはここで、まさにパウロと同じく、聖別された人という媒体を通して、聖霊が聖書すべての著者であると教えています。この理由により、聖霊そのものが聖書すべての完全で正しい理解を与えることができるのです。

「聖書の預言はみな、人の私的解釈を施してはならない。」（Ⅱペテロ1:20）とペテロは言っています。それはつまり、聖霊から離れて、自分の理解だけでは聖書を正しく解釈できないということです。しかし、内に住まわれる聖霊を個人的に受けたクリスチャンは、聖霊というキリストご自身が言われたみことばの真理の導き手と教師が与えられます。そしてこれは、聖霊のバプテスマのもたらす素晴らしい実の2つ目の本質で、超自然的ないのちへの入り口、聖書を通した私たちの個人的な導き手となる聖霊です。

ティーチング・レター

原稿: TL-L079-100-JPN

最終更新日: 29 Oct 2026

ウェブサイト: Derekprince.com/ja/resources

